

## 本書の使い方

この本を手にしてしているあなたは、仕事上の関心から東南アジアの情報を求めている社会人だろうか？それとも、政治学を専攻する大学生だろうか？

本書の趣旨は、政治学の知見を活用して東南アジアの現代政治を読み解く、というものだ。この地域の政治そのものに興味をもつ方と、政治学上の関心から東南アジアについて知りたい方のどちらにも役立つように工夫した。

本書でわれわれは、政治制度に焦点を当てて、域内先進国のタイ、マレーシア、シンガポール、フィリピン、インドネシアを比較した。トピックごとに、5カ国のあいだの差異に注目して、なぜ違いが生じたのかを政治学の理論を使って説明している。また、この5カ国が中心になって構成する東南アジア諸国連合（ASEAN）について、開発途上国がつくったほかの地域機構と比較して論じた。

東南アジアの現実を知りたい読者のなかには、「制度の話なんて退屈だし、理論など役に立たない」と思っている人がきっといるだろう。この地域の政治を理解するのに、制度の働きを知ることがなぜ必要なのか、比較と理論がどうして重要なのかということを序章で説明した。だからたったいま手にした本を書棚に戻す前に、もう少しページを繰っていただけるとうれしい。もちろん、この本を最後まで読んでもらえたらもっとうれしい。本書の各章は、それぞれ単独で読んでも理解できるように書かれている。けれども制度は相互に影響を与え合う関係にあるから、通読すればいっそう理解が深まるはずだ。

本書を読むのに予備知識はあまり必要ない。政治学の面でも東南アジア事情の面でも、各章の要点を理解するうえで必要な情報は盛り込んである。しかし、この一冊で知りたいことがすべてわかったということにはならないだろうし、逆に気になること、不思議に思うことが本書を読む前より増えてしまったということになるかもしれない。政治学については、幸いな

ことに良質な教科書、概説書がいくつもあるから、理解を深めたい読者はそちらを参照してほしい。本書のトピックとかかわりが深いものなかでは、建林ほか [2008] と川人ほか [2011], 河野 [2002] をとくにお薦めしたい (書誌情報は巻末の「参考文献一覧」に記載した)。各国事情についても、やはり幸いなことに、日本には分厚い研究蓄積がある。本書第1章の第1節で5カ国の政治史を簡潔に記述したが、物足りなさを感じる方は「参考文献一覧」に記載した文献にあたっしてほしい。アジア経済研究所から出版されたものならば、公刊から5年以上経過した論文の多くはウェブサイトから無料でダウンロードできるから、ぜひチェックしていただきたい (<http://wwwide.go.jp/Japanese/Publish/download.html>)。

逆にこれまで不足していたのは、政治学の知見と各国についての情報とのあいだをつないで、一般性のあるものの見方で東南アジアの政治を理解するのに役立つような本だ。筆者は地域事情の勉強から入ったのだが、かなり長いあいだ、政治学の知識と地域事情に関する知識が頭のなかで分離した状態にあった。正直に言えば、この二つを結びつけて研究を進められるようになったのは最近のことだ。政治学と東南アジア研究の知見を接続すると、どのような新しい地域理解が生まれるのか。それを示すことに本書では力を注いだ。タイやインドネシアについての知識をばらばらに仕入れられるのではなく、日本の政治について考えるときにも応用が利くような、有機的なつながりのある知識を構築するのに本書を役立ててほしい。地域事情より政治学の方に興味がある読者にとっては、慣れ親しんだフォーマットにしたがって東南アジアについての知識を仕込むのに使える本になっていると思う。理論と地域事情の双方について、できる限り最新の研究成果にまで目を配るよう心がけたので、勉強をさらに進めていくうえでのリファレンスブックとしても本書が使えるはずだ。

なお、本書は幅広い層の読者を想定しているため、人名のカタカナ表記については新聞報道などで一般的に使われている表記法にしたがった。英語の参考文献については、訳書が出版されている場合には訳書を「参考文献一覧」に記載した。

本書は、アジア経済研究所において2010年度から2011年度にかけて実施した『東南アジア政治制度の比較分析』研究会の最終成果である。国内政治に関する章を担当した4人の執筆者はおのおの、これまで5カ国のうちのひとつをおもな研究対象としてきた。5カ国を比較して論じるのはわれわれにとって新たなチャレンジであったから、知識を共有し、助言し合い批判し合って成果の質を高めるべく努めた。毎日顔をあわせる同僚だからこそスムーズに作業ができた。その意味で本書は、アジ研らしさがよく現れた本だと思う。

研究会では、中西嘉宏さん（在ワシントンDC 海外研究員）、青木まきさん（地域研究センター）、任哲さん（同）、小林磨理恵さん（図書館資料企画課）と、今年4月に青山学院大学に転職された林載桓さんにオブザーバーとして議論に加わっていただいた。また、出版にあたり匿名の査読者2氏に加え、外部評価者2氏から有益なコメントを得た。記して謝意を表したい。

2012年9月 編者